

緩和ケアニュース

第16号 特集：PCA ポンプ導入

～がんの痛みを我慢させないために



2008. 6月 発行
財) 倉敷中央病院
緩和ケアチーム

特集

PCA ポンプ導入しました～がんの痛みを我慢させないために

がんに伴う痛みの治療に関しては、近年モルヒネやオキシコドンといったオピオイド系の鎮痛薬が積極的に使用されるようになり、大きな進歩が遂げられました。オピオイド系の鎮痛薬を投与方法として、第一に選択される方法は内服薬の経口投与ですが、消化器癌の患者さんなどでは経過中に消化管の閉塞などを生じるため、経口投与が困難になることもしばしばあります。経口投与ができなくなった場合の投与の方法として、坐薬や経皮吸収剤の貼付薬をもちいることが可能ですが、激しい痛みに対して比較的大量の鎮痛薬を必要とする場合などは、注射剤を用いた持続皮下注射や持続静脈内注射が必要となります。

がんに伴う痛みは持続的な痛みもあれば、突発的に強まる痛みもあり、突発的に強まる痛みに対しては、即効性のある鎮痛薬(レスキュー)として投与することが必要です。注射薬の持続注射による痛みの治療を行っている場合、もちろんレスキューとして用いる薬剤も注射薬、ということになります。

従来のシリンジポンプを用いて鎮痛薬の持続注射を行う場合、患者さんは痛みを感じると、ナースコールで看護師を呼び、痛みの程度を伝え、看護師はこの訴えを聞いてから医師からのレスキューの指示を確認し、指示に従って注射薬を投与する、という過程を経てようやく痛みが緩和されていました。たびたび痛みを感じる患者さんなどは看護師を呼ぶことを遠慮してしまったり、看護師の側も限られた人員で対応しなければならな

い、鎮痛薬の投与までに時間が掛かってしまったりして、どうしても患者さんに痛みを我慢させてしまう場面が多くなってしまいます。

もしも患者さんが痛みを感じたときに患者さん自身で鎮痛薬の追加投与ができたなら、痛みを我慢してもらわなくてもいいのに……このような理想を実現できるのがPCA(患者自己調節鎮痛)という方法です。倉敷中央病院緩和ケアチームでは2007年12月にPCA機能を有する携帯型精密輸液ポンプ(GADD Legacy PCA)を導入しました。この装置には『DOSE ボタン』というボタンがついており、患者さんが痛みを感じたときにこのボタンを押すと、あらかじめ設定されていた量の注射薬が追加投与される、という仕組みになっています。



実際の患者さんに対して使用したところ、患者さんからは『夜間にいちいち看護師さんをよばなくてよいので、遠慮することもないし、安心できるようになった。』との声が聞かれ、従来の方法ではいかに患者さんに我慢を強いていたのかということを痛感しました。

鎮痛薬を患者さん自身が追加投与できるようになった場合、鎮痛薬の過量投与が生じてしまう危険も当然あるわけですが、この装置にはDOSE ボタンを押しても一定時間は追加投与ができないようにす

る『ロックアウトタイム』などの設定も可能であり、安全性の点でも優れた装置であるといえます。

がんの患者さんに痛みを我慢させないために、われわれ緩和ケアチームとしては今後も引き続き PCA ポンプを積極的に活用していきたいと考えています。

外科 池田博斉

パンフレットのご紹介

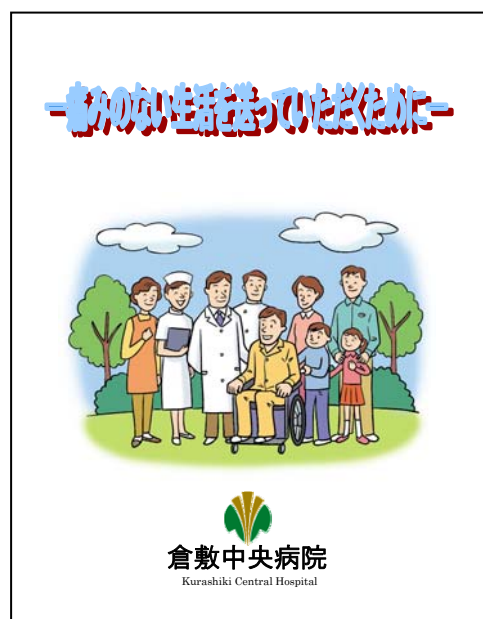
がん患者さまの 80%は痛みを経験します。痛みにより行動の幅が狭まったり、食欲が落ちたり、睡眠不足になると気持ちもいらいらしたり、落ち込んでいきます。痛みは我慢するのではなく、自分の望む生活に合わせたコントロールを早め早めに行っていくことが現在の考え方です。また、痛みのコントロールの中心は「医療用麻薬」です。麻薬への誤解や偏見から、使用に抵抗を感じる方も多いと思いますが、使用方法の確立により、安全に痛みのコントロールが行えるようになっています。

倉敷中央病院 緩和ケアチームでは、こうしたがんの痛みに関する事柄を正しく知って頂くために、「痛みのない生活を送っていただくために」というパンフレットを作成しています。ご興味がある方は緩和ケアチームにご相談ください。

がんの痛みを我慢しないでください

強い痛みが続くと、少しも眠れず、食欲は無くなり、体力の低下にもつながります。物事をしっかりと考えることもできなくなり、家族や友人との会話でさえおっくうになり、日常生活を妨げます。

痛みがなくなると眠れるようになります。食事もおいしくいただけるようになります。活動範囲も広がるでしょう。がんの痛みは取り除くことができます。しかし、痛みは我慢できなくなる程強くなると、その治療も時間がかかります。がんと診断されたら、痛みがでる前に情報を集め、あらかじめ痛みの治療法の説明をうけるなど、痛みが起きてからどうしようと思わないよう、知識を身に付けておきましょう。[パンフレット序文より]



<目次>

- ①がんの痛みを我慢しないでください
- ②がんの痛みの原因には様々なものがあります
- ③あなたの痛みを伝えてください
- ④痛みの治療について
- ⑤治療の目標を決めましょう
- ⑥鎮痛薬を用いた薬物治療について紹介します

- ⑦薬物治療法にともなう副作用について
 - ⑧がんの痛みに使う鎮痛薬を誤解しないでください
- 薬剤部 小原和久

がん相談支援室設置のご案内

当院では、がんでお悩みの患者さまやご家族の方が安心してご相談頂ける窓口として「がん相談支援室」を設置しております。

がん相談支援室は、がんに関する不安や悩み、誰にも打ち明けられない気持ち、病気に対する疑問など、さまざまなご相談をお受けしています。どこに相談したらよいかわからないとき、療養上の支援が必要なときなど、気軽にご相談ください。ご相談の内容によっては、関係スタッフに確認したうえで返答させていただきますのでお時間を頂くことがあります。医師からの返答が必要な際には、電話での対応や即答することが困難な場合があるため後日書面でお返事いたします。その際は、連絡先、住所をうかがうことになりますのであらかじめご了承ください。相談内容は秘密を厳守いたします。

相談日：月曜日～金曜日（休日を除く）

時間：9：00～15：00

相談場所：倉敷中央病院内 総合相談・地域医療センター がん相談支援室
（医療福祉相談室内）

連絡方法：電話 086-422-5063

電話でのご相談、直接来院いただいでのご相談、いずれも可能です。直接ご来院の場合は総合相談でお尋ねください

相談時間：30分

公開講座開催のご報告

第8回倉敷緩和ケアセミナーを平成20年4月12日土曜日に当院の大原記念ホールで開催しました。講師には六甲病院緩和ケア病棟チャプレン・カウンセラー 沼野尚美先生をお招き致しました。『末期がん患者の心のケア～患者とのコミュニケーション～』という演題でご講演いただきました。院内外から150名と多数の方々に参加していただきました。

以下に沼野先生の著書をご紹介します。

『癒されて旅立ちたい』佼成出版社 2002年
『共に生きる道』 佼成出版社 2004年
なお、第10回倉敷緩和ケアセミナーの講師として再度沼野先生をお招きできる事となりました。開催日時について詳しい内容につきましては別途お知らせする予定です。



窓口

編集部では『緩和ケア』『在宅ホスピス』について、患者様、ご家族のご意見、ご要望、体験談などを募集しています。このレターに関するご意見、ご質問などもお寄せください。

発行元：財）倉敷中央病院

編集委員長 小笠原敬三（副院長）

編集委員（五十音順）

岡野麻美（医療相談） 小原和久（薬剤師）

里見史義（作業療法士） 白神孝子（看護師長）

平賀恵美子（歯科衛生士）

村木咲子（看護師長）